

滋賀県内の感染管理認定看護師に関する現状

1. 感染管理認定看護師の活動年数

年数	5年未満	6~10年	11~15年
人数	6人	3人	9人

2. 病院での活動状況

- 専従.....8人
- 専任.....10人

3. 感染管理認定看護師としての処遇

- 特別手当あり.....9人
- 特別手当なし.....9人

4. 感染管理認定看護師として、現在困っていること

- CNICの後任者がなかなか見つからず、一人では業務負担が多いので困っている。
- 兼務(他の部署、看護師長等管理業務等)のため、活動時間の確保や多重業務のため負担が大きい。
- 感染管理の対応が間違っていないかを相談する場がコロナの影響で無くなったので困っている。今までは話し合える場もあったが、話し合える場所を失ったので不安がある。

- 専従業務が長期間になると、いつか病棟などの現場へ復帰することに不安がある。
- 感染管理業務の内容が、1年以上にわたってコロナ対策のことばかりなので他の業務に手が回らないこと。等

5. 看護協会活動への要望や意見

- 協会とのつながりが大切なので、滋賀県看護協会での情報交換会は、クラスター対応等について大変参考になった。
- 全国の遠方ではなく、滋賀県内で認定看護師に対するサポートの場所が欲しいです。
- 滋賀県の感染対策の「質」の保障のために、「感染対策のこれだけはやっておきましょう」というように各施設への速やかな情報発信をしてもらえないか希望します。
- 滋賀県の医師会で活動する滋賀県感染制御ネットワークとの活動連携や協体制づくりを行って欲しいです。
- 滋賀県看護協会をはじめ、各保健所、滋賀県のネットワーク、有志の会と様々な場所でICNは活動しているのでより効率的に負担が偏らない運営を検討してもらいたいと思います。等

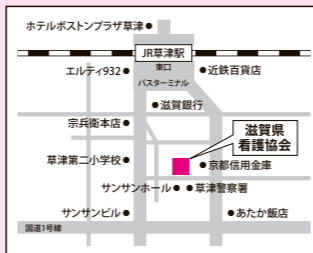
ナースレーク特集号の発行にあたって

新型コロナウイルスの国内での蔓延が1年以上経過し、医療分野だけでなく「Life」全般においてコロナウイルスの影響を考えなかった時間はなかったのではないのでしょうか。滋賀県内でも様々な医療機関を中心に幅広い分野でたくさんの看護師の皆様が奮闘しております。こんな時だからこそできることは何なのか？看護師の専門職としての知識と経験を分野という垣根を越えて「Life」に活かしていくための支えになることが看護の一面ではないかと思えます。雨が降った後には虹がかかるように、必ずこの新型コロナウイルスとの戦いも落ち着く日が来るはず。いつの日か皆様が「あの頃は...あんなこともあったね」と笑顔でこの経験を語れる日が来ることを信じて、今はこの冊子が少しでもエールになることを願っています。



公益社団法人 滋賀県看護協会

〒525-0032 滋賀県草津市大路二丁目11番51号
 TEL.077-564-6468(代表) / FAX.077-562-8998
 E-mail: sigakan@gold.ocn.ne.jp
 ホームページ: <http://shiga-kango.jp/>
《詳細は、ホームページから閲覧して下さい。》



Nurse Lake

広報紙「ナースレーク」

新型コロナウイルス感染症対応 特集号



三方良し精神で
看護の力で
滋賀を元気に!

県内各地あらゆる場で看護職が力を合わせて頑張りました

新型コロナウイルス感染症対応特集号に寄せて

2020年は、ナイチンゲール生誕200年・看護の日制定30周年等の記念年であり、人々の健康向上に貢献するために行動するNursing Nowキャンペーン「看護の力で健康な社会を」の世界的な活動強化年でもありました。そのような中、滋賀県では、2020年3月5日に、初めての新型コロナウイルス感染症患者が発生して以来、その予防対策や対応に県内のあらゆる看護現場の看護職が最前線で全力奮闘してきました。

さまざまな施設で奮闘してきた感染管理認定看護師や看護管理者のこの1年間の活動を「特集号」として企画いたしました。皆様と活動を共有し、「三方良し精神で 看護の力で滋賀を元気に!」できるよう頑張っていきたいと思います!

滋賀県看護協会会長 廣原 恵子

第一種感染症指定医療機関としての取り組み

市立大津市民病院 感染管理認定看護師 横谷 恵



当院は、2020年3月からこれまでに約230人の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）患者を受け入れました。COVID-19患者の動向に合わせて、いくつかの病棟を休床し感染症病棟を増床、12月には感染症ERが開設されました。感染症病棟では、当初は看護管理者、その後は各所属から1～2人の看護師を募集し、運用しました。現在では、専任病棟の看護師で構成しています。私は現在、病棟師長と感染管理室を兼務しています。様々なことを経験し



た1年間を振り返りたいと思います。年齢でADL支援が必要な患者が増加しました。他部門からの感染対策指導の必要性も高まり、専任感染管理認定看護師を中心に、県や市とCOVID-19対策に関する調整を密にしました。また、感染対策会議やマニュアル作成で情報を発信し、医師や看護師、パラメディカルや事務職員にも、現場で感染対策指導を行いました。



病棟師長として、まず看護師一人ひとりに「既往症や高齢者や子どもとの同居」について聴き、感染症病棟での勤務が可能と確認できた看護師を、感染症病棟の応援要員としました。夏頃からは軽症から重症患者まで診療が多岐にわたり、高

齢でADL支援が必要な患者が増加しました。他部門からの感染対策指導の必要性も高まり、専任感染管理認定看護師を中心に、県や市とCOVID-19対策に関する調整を密にしました。また、感染対策会議やマニュアル作成で情報を発信し、医師や看護師、パラメディカルや事務職員にも、現場で感染対策指導を行いました。私自身も感染病棟での勤務を経験しました。COVID-19対策では、常に正しいPPEの着脱が求められ、身体的・精神的に大きな負担となります。また、感染症病棟に従事していない看護師や他部門の職員にも、院内感染予防策のために行動の制約が続き、大きなストレスとなっています。感染管理認定看護師として、職員全体が安心して安全に勤務できるよう、これからも尽力したいと思います。

地域における感染症指定病院の現状

彦根市立病院 感染管理認定看護師 H.T



湖東保健医療圏においては、まず当院が2020年2月より帰国者・接触者外来を開設するとともに、新型コロナウイルス感染症患者の入院を受け入れできるよう準備をすすめました。その後、徐々に近隣病院でも診療体制が整備されるようになり、2021年2月の時点で帰国者・接触者外来が2病院とPCRセンターが2病院で開設中であり、各医療機関や管轄の保健所と連携しながら新型コロナウイルス感染症への対応をしています。

また、滋賀県内の新型コロナウイルス感染症患者用病床を適正に運用するため、2020年9月から彦根市内のホテルが2ヶ所目の宿泊療養施設としての利用を開始さ

れました。そのホテルでの医療体制については、長浜赤十字病院と当院の職員がサポートをすることになっており、当院からは月・水・木に医療班の一員として登録した医師と看護師が数時間の訪問をしています。その他にも、入所時のオリエンテーションに関する動画を作成したり、無料通話・メールアプリのLINEを活用し、宿泊療養施設の実務担当者からの相談に昼夜を問わず応えています。当院が感染症指定医療機関として果たすべき役割は沢山あり、今後も多くの困難を経験する可能性が考えられますが、地域医療を守るために病院職員が協力し合い、1つずつ解決に繋がっていききたいと思います。



地域を支える感染症協力病院としての学び ～ コロナ禍における看護 ～

大津赤十字志賀病院 感染管理認定看護師 前田 朋美



当院は2020年4月から帰国者・接触者外来、スタッフの協力体制のもと新型コロナウイルス感染症病棟を再変し、運用開始。軽症、中等症の患者の治療、看護に当たり、2021年2月現在、総入院患者数は156名となりました。

新型コロナウイルス感染対策においては、院内の全職員に手指衛生、マスクの着用、ゴーグル・フェイスシールドの着用の徹底、健康チェック、3密を避けた環境整備、防護具の着脱、環境消毒、面会禁止等、感染対策マニュアルを作成し、指導を繰り返し行いました。

当院で目指したことは、①感染症を受け入れる病院であっても、患者、職員を感染症から守り、一般患者の診療、これまでの看護実践を変わりなく患者に提供すること②新型コロナウイルス感染症に従事するスタッフ



が不安を抱えない体制を構築することでした。臨床現場では、多職種で繰り返し協議しながら体制づくりを行いました。

新型コロナウイルス感染症受け入れ病棟では、医師、看護師、コメディカルがワンチームになり、師長、係長を中心に、新型コロナウイルス感染症患者の全身状態の変化に目を離すことなく、日々の治療の経過を評価し、また、患者さんの抱える不安、ストレスと向き合い、寄り添う看護が実践されてきました。その結果、院内での感染者はなく、感染症の病棟を避けていたスタッフも新型コロナウイルス感染症病棟で感染対策に取り組みながら、看護が実践できています。また、一般病棟においても、診療体制が変わる中でリスクを考え、感染対策を意識した診療、看護実践に取り組んでいます。



周産期領域における 新型コロナウイルス感染症対策への取り組み

大津赤十字病院 感染管理認定看護師 清水 理絵



私は感染管理認定看護師として業務を行いながら、産婦人科病棟で助産師としても勤務しています。当院では新型コロナウイルス感染症対策として、新型コロナウイルス感染症に罹患した妊産婦の受け入れを前提としたマニュアルやフローチャートを作成しました。患者の搬送経路・役割分担・具体的な感染対策を繰り返しシミュレーションしています。母児の速やかな対応ができるよう、産婦人科と新生児科が連携し受け入れ準備を行っています。

また、新型コロナウイルス感染症診療にはタブレット端末など通信機器が用いられるようになっていますが、周産期領域におけるケアはリモートでは行えないことが多々あります。経膈分娩を例に挙げると、当院では通常分娩でも産婦さんにマスクを着用してもらうよう取り決

めましたが、実際はマスク着用ができなかったり叫び声を上げたりする産婦さんは多くおられます。長時間付き添う職員は、ウイルスへの曝露リスクが高い状態でケアを行わなくてはなりません。当院では、原則サージカルマスクに加えて目の保護を行った上でケアを行うこととし、感染症を疑わない産婦さんのケア時にも、標準予防策の実施を徹底しています。

当院は総合周産期医療センターとしての役割を担っており、ハイリスク妊産婦への診療を行うだけでなく、NICUを併設し他院からの新生児搬送も受け入れています。滋賀医科大学病院とともに、いわば「滋賀県周産期医療の砦」の一つであると言えます。砦を守るべく、今後も感染対策に取り組んでいきます。



精神科病院でのコロナ対策における奮闘

セフィロト病院 看護部長 脇坂 直隆



当院での新型コロナウイルス感染症対策が始まって1年が経過しました。この1年間を振り返り、患者・家族、地域関係者、病院職員などが力を合わせ感染対策に取り組んでこられたことに感謝しなければなりません。

当初は、个人防护具の入荷困難な時期もあり、自分たちでアイシールド、エアロゾルBOX、ビニールガウン、ガ



ウン掛け、病室内の間仕切りなどを作成しました。毎年、インフルエンザやノロウイルス対策は実施していましたが、ゾーニングや个人防护具の着脱教育を継続的に実施したことはありませんでした。感染委員会と急ピッチでマニュアルを作り上げる



中で、感染症教育の大切さを痛感しています。

また、これまで培ってきた精神科病院としての安全対策や看護のやり方を変えざるを得ないこともありました。『そのらしさを支える』ことを精神科看護の役割だと考えて来ましたが、この1年は

「そのことは、あとから考えることとして…」という感覚になっています。新たな感染症のため、仕方ないことかもしれませんが、当院（精神科）での感染症対策の不十分さを反省しています。

今後は、感染症対策を強化しながら、当院での精神科看護を再構成していくことが重要だと考えています。

重症心身障害児者受け入れ施設の取り組み

びわこ学園医療福祉センター野洲 看護部長 吉田 昌佐美



COVID-19の感染が拡大する中、「持ち込まない・広げない」ことが一番の感染対策であるため、多くの制限を強いることとなり、利用者の生活は大きく変わりました。生活の潤いの部分への影響はもちろんですが、職員の防護具の着用は利用者の発達を促す場面において影響を与える物だと思っています。コミュニケーションは、ノンバーバルが占める割合が93%、そのうち表情やしぐさが55%。発達年齢が3歳未満の多くの利用者にとってマスクは、嬉しい、楽しいなどの感情が伝わりにくくなってしまいます。また、肌と肌の接触が愛情の伝達であるとするなら、手袋やガウンはその機会を奪っていることとなります。防護具の選択は心の痛みを伴いました。

一方、強度行動障害といった障害特性（強いこだわりや異食等）のある利用者の居室には容易に物を置くことが出来ません。消毒液の誤飲、マスクやゴーグル、エプロ

ンに対する受け入れ困難、異食の可能性。そもそも個々にとって非日常は強いストレスに繋がりがやすいため、心理的不安定を心配する中、一つ一つ慎重に導入している状況です。「数日間の辛抱ね」と言えると思いますが、入所施設は生活の場として長い目で考えなくてはなりません。少しずつ生活の潤いのために工夫を凝らし、一日も早く日常を取り戻せるまで頑張っている職員に感謝の気持ちでいっぱいです。



湖北地域における医療体制の現状とこれからの期待

長浜赤十字病院 感染管理認定看護師 中村 忠之



湖北地域は、約15万5千人の人口を抱え市立長浜病院と長浜赤十字病院の2つの基幹病院が急性期医療を担い、長浜市立湖北病院、セフィロト病院が慢性期や精神科領域の医療を担当しています。また、地域の特性として高齢化が進んでいることから、高齢者施設等の介護の力によって地域医療が守られています。



新型コロナウイルス感染症の流行初期から、地域において病院だけではなく介護現場も含めた感染対策に取り組んできました。保健所職員や病院看護師が、高齢者施設に訪問し指導・相談する体制を整備し、介護関連職員に対して集合研修等を行ってきました。第一波・第二

波においては地域において医療関連のクラスターは発生せず、流行初期からの取り組みが役に立ったのではないかと考えています。第3波においては医療関連のクラスターが発生しましたが、すでに連携が取れていたため早期に介入ができ対応することができました。日頃からの行政・医療・介護の連携が重要と再認識しました。

軽症者対応療養施設については、彦根市に設置されたことから彦根市立病院と長浜赤十字病院の医師・看護師がサポートする体制で対応しました。通常の病院業務がある中でのサポートになるため負担はそれなりにかかりますが、療養施設で対応している看護師にとっては精神面も含め大きな支えとなりました。相談できる体制や急変時のバックアップ体制等を整備したことでスムーズな運営ができたと考えています。もちろん医療班だけではなく、支援班・事務班との協力を得られたことが大きな要因の一つです。

新型コロナウイルス感染症対策に関する専門家派遣体制の構築

滋賀医科大学医学部附属病院 感染管理認定看護師 竹村 美和



COVID-19のクラスターが発生した際には、感染の拡大防止と早期封じ込めのための対策、そして病院や施設の機能維持・回復が必要であり、施設状況に応じてその対応を速やかに行わなければなりません。施設独自で感染対策を進めるのが困難だったり、どこに支援を依頼すればよいかわからなかったりする場合もあります。保健所と連携して迅速に感染制御を進めるため、県にはクラスター対策チームがつくられています。また、厚生労働省からの委託を受けて日本環境感染学会が感染対策の専門家を派遣する事業を開始し、滋賀県では、滋賀医科大学医学部附属病院が事務局となり、滋賀県、クラスター対策チーム、そして滋賀県感染制御ネットワーク事務局（滋賀

県病院協会）が連携する体制が整えられました。複数の感染者が発生した施設と保健所が相談し、支援が必要であれば県に依頼、県から依頼を受けた滋賀県病院協会を通じてあらかじめ登録された感染管理認定看護師が派遣されるため、看護師が速やかに支援活動に入ることができます。多くの感染管理認定看護師に登録していただければ、さらに迅速な対応ができると思いますが、現在の事業では制限があるため保健所圏域ごとに計6名の感染管理認定看護師が登録されています。

COVID-19パンデミックに対応するには、県、保健所、病院、介護福祉施設の連携は重要です。支援が必要と感じられた場合は、早めに保健所にご相談ください。



クラスター発生からの学び

済生会滋賀県病院 感染管理認定看護師 筒井 俊博



私は感染が拡大した第3波の中で、厚生省からの委託事業としてクラスターが発生した医療機関に派遣されました。実地疫学専門家の鈴木先生や保健所の方々、滋賀県立総合病院の中川ICNらと協力しクラスター対策に取り組みました。発生要因や接触者の追跡調査は鈴木先生からの情報を活用して行い、个人防护具の取り扱いやゾーニング、環境調査を行いました。

クラスター対策の基本は、「時間・場所・人」の3要素を念頭に置くことです。発生時間や場所、人の数や行動などを調査し可視化しながら、誰から誰にどう伝播したのかを調査しました。看護師以外の職種、リハビリ担当者などへの発生やフロアをまたいでの発生が懸念さ

れ、建物の構造、間取り、使用物品などから検討し、何が最善かを短時間で話し合い、チーム共有することが大変でした。現場で疲弊している他施設の職員へは、共感する姿勢を忘れず个人防护具の取り扱いの改善に取り組みました。

「人事を尽くして天命を待つ」、約1年以上にわたる国内でのコロナウイルスとの戦いでは、脅威を甘くみることなく、憶測や批判にひるむことなく、しっかりとした態勢や備えを進めることや情報共有は迅速に伝達するなどの基本をやりきり、あの穏やかな日々が戻ってくると天に委ねる気持ちで今後も取り組んでいきたいと思っています。



クラスターの事例を経験して

地方独立行政法人公立甲賀病院 感染管理認定看護師 木下 桂



公立甲賀病院は、甲賀圏内で唯一の急性期医療機関であり、また、第2種感染症指定医療機関として早期からCOVID-19の外来・入院診療（病床数18床）を開始し、通常診療とCOVID-19の感染症診療を並行して行う状況にあります。

このような中、COVID-19の感染対策においては、最善の注意を払って対応してきましたが、残念ながら昨年の12月25日に1回目、そして、その終息から僅か約1週間後に2回目のクラスターが発生し、自施設の職員は皆、大変大きなショックを受けたと共に、滋賀県の各医療機関、行政、滋賀県看護協会等におかれましては、危機的な状況であると捉えられたことはまちがいでなく、ご迷惑とご心配をおかけしましたことを申し訳なく思います。

クラスターの対応については、当院の対策本部のみでなく早期から甲賀保健所や滋賀県のクラスター対策班、他施設のICNが支援に来て下さいました。また2回目のクラスターでは、厚生労働省のクラスター対策班が介入し、感染拡大の原因究明と今後の対策についてご指導を頂きました。

この2事例から学んだことは、職員全員がこの危機を共有し一致団結してクラスターの終息に向けて取り組むことが重要ということです。そして、感染対策を確実に実施することに尽きます。この経験を通して、職員一人一人が「もうクラスターを起こさない」という意識を高めたと信じて、今後も注意深く対応していきたいと思っています。



訪問看護分野での感染対策の取り組みと訪問看護師が抱える不安と現状

在宅ケアセンターみのり 日永 めぐみ



当初は、日々、国や県から送信されてくる情報が多く、不安が強くなりました。そこで、事業所内に感染対策委員会を設置し、新型コロナウイルス感染症マニュアルの作成に着手し、研修会等を受講し、修正を行いました。

マスク使用や手指消毒は基本とし、パソコンや机、車両等は使用後にアルコール消毒を行う、パーテーション設置、集合するスタッフの人数を減らし、3密避けるために対策を実施しました。10名以上のミーティングを休止し、利用者の情報共有はカルテを見ながら少人数や個々のスタッフ間で実施しました。

マスク・手袋・エプロン等備品の不足がスタッフの不安



とならないように在庫管理を強化しました。利用者やご家族は自宅ではマスクは使用されません。飛沫感染対策として、PEE防御の判断基準を基に

フェースシールド等の装着も標準化しています。

現在は利用者や職員に陽性者や濃厚接触者の発症は確認していませんが、感染者が出た場合の訪問や対応について早期に検討していく必要性を強く感じています。職員メンタルケアへの取り組みはまだまだできていない状況にあります。体調の変化や不安が発信でき、感染予防対策がしっかり継続できる環境を作っていきたいと思っています。

高齢者施設のコロナ対策の取り組み ～感染者発生後の対応と課題～

特別養護老人ホーム 坂田青成苑 施設長 呉竹 礼子



高齢者介護施設は、入所者自身が施設外から新型コロナウイルスを持ち込む可能性は低いと考えられる。一方、高齢者介護施設のスタッフ自身が無自覚のうちに何らかの形で施設内に新型コロナウイルスを持ち込む可能性が考えられるため、日頃より行動等に関しては注意喚起を行っているところである。

そこで、今回、当施設内においては体調不良者（入所者、職員共に）がない状況の中、入所5日目に病院受診（循環器内科）し、入院時スクリーニングで抗原検査陽性が発覚した事例への対応について紹介したい。

まず初めに、2フロア（入所者20名と34名）のゾーニング、各居室を赤色ゾーン、廊下黄色ゾーン、他を緑ゾーンとしてビニールシート等で仕切ることにした。物品の準備は居室に入れるもの、ローカに置くもの、緑ゾーンに置くものなど居



室ごとに対応できるように準備した。居室内で食事、排泄等の援助が行えるようにすることと、居室に入る回数を減らす工夫を行った。

今回、ゾーニング等がスムーズに行えた理由は、管理職間で感染者、濃厚接触者が発生した事を想定して机上のシミュレーションを行っていたことが十分生かされたと感じている。しかし、職員への教育が不十分であったため、各フロアにリーダーを日勤で固定しておくべきであったと反省している。

感染症が発生した場合、高齢者施設においては看護職員がリーダーシップを発揮し、介護職員への指導等が行えることを期待しているが、その点も今後の課題となり、日頃からも備えた体制作りと職員教育の重要性を痛感した。

さらに法人全体の課題として、入所前検査の導入と感染対策物品の備蓄等について検討しているところである。

コロナ禍における診療所の現状

ますだ内科医院 看護師長 増田 麻希子



当院では、発熱や風邪症状のある患者は、まず電話にて問診をし、診察の案内をしています。自宅か駐車場待機してもらい、感染患者用の入り口から入ってもらいます。入口に案内表示をしています。発熱や風邪症状でも受付窓口へ来られる

方や、診察室ではじめて風邪症状を訴える方もおられ、常に感染のリスクにさらされていると感じています。

感染患者用の診察室は、内視鏡室を改装し感染患者用の入り口を増設しました。当初は処置室の奥にパーテーションで感染者用の診察スペースを作り診察をしていましたが、処置室では点滴や採血をすることもあり、限られたスペースで感染対策をする難しさを感じていました。また、備品の確保も大変でした。今では滋賀県から個

人防護具の無償提供がありますが、当初は卸し業者からの納入も困難で、高額な金額でマスクや消毒液をネットで購入し、医療用キャップは、シャワーキャップを代用し今でも使用しています。例年に比べ患者数も減り、収入も減ってきている中、厚生労働省や甲賀市から感染拡大防止事業に対する補助金を頂きとても助かっています。

当院の感染対策について不安を持ちながら日々の業務を行っていましたが、滋賀県看護協会感染管理認定

看護師に当院の感染対策の現状を見ていただき、ご指導をいただいたことで、少し自信を持てるようになりました。しかし、日々の業務で緊張を強いられる状況が続いており、新型コロナウイルス感染症の終息を願うばかりです。



軽症者宿泊療養施設の歩み

宿泊療養施設 ホテルピアザ淡海 看護師 Y.M



第3波が始まり、2020年11月1日から、ホテルピアザびわ湖は宿泊療養施設として3回目の開所を迎えました。宿泊療養施設では、電話での健康観察を行うため、療養者自身のセルフモニタリングが必要で、昨日と比較して今日はどうかと、ご自身で症状を自覚してもらうことが重要です。症状悪化時は、速やかに搬送、入院ができるように療養者と関係各所との連絡、調整が必要です。また、搬送される療養者の不安を助長しない言葉かけをするよう心がけています。

新型コロナウイルス感染症について、明らかにされてきたことも多く、スタッフ間での発言のずれが生じないように、統一した文面を作成し、説明することで入所者の不安軽減に繋げることができました。

自分たちの健康管理も重要



で、コミュニケーションを取り、ストレスがたまらないように心がけました。呼吸状態が不安定、発熱が続くといった症状がある療養者がいる場合、療養者自身だけでなく、私たちが不安が大きく、朝方の健康観察で状態悪化がない報告を受けると安心します。

年末年始は、感染者数も増え、入所者数も一気に増加しました。アンダートリージにならないよう、症状を細かく問診し、継続的な観察ができるよう、申し送りツールを活用し、スタッフと情報共有を行いました。また、入所対応、健康観察など、役割分担を行い、事故なく、漏れなく、を心がけています。

感染の波が予測できず、いつクラスターが起きるかわからない状況の中、自分たちの安全も守りつつ、療養者の変化を早期に捉えられる力を養っていきたくと考えます。

看護学校の感染対策の取り組みとコロナ禍の歩み

滋賀県堅田看護専門学校 学校長 井上 美代江



本校では学生が感染しない、感染させないことを目指してCOVID-19感染拡大防止対策に取り組んで参りました。臨地実習ができない、学内で授業・演習ができない状況の中で、今まで大切にしてきた『人との関わり』をどのようにして学ぶのか難しい課題でした。

急遽、ネット環境を整え、5月中旬から遠隔（Zoom）授業を開始しました。遠隔授業は感染の機会が減らせ、授業に集中できチャットで質問も自由にできますが、双方向の授業であってもお互いの表情や反応、雰囲気をとら



えることはできません。授業は3密を避け換気に留意し、他校の対策を参考にし学内での授業を増やしてきました。また、臨地へ行け



なくなり臨地実習は学生にとって、看護の実際を学ぶ貴重な場であることを再確認しました。学生は患者や家族、看護師をはじめとする医療従事者の方々の関わりで看護職を目指す者として成長しています。実習が制限、制約されるなかで実習内容を精選する必要性を感じています。

そして、学校祭等の教科外活動は学生の社会性、協調性を育む機会であるため、制限されたなかでも来年度は工夫していきたいです。

今年度の対策を評価し、学生、職員が一丸となってwithコロナ時代の教育を進めていきたいと考えています。コロナ禍において感染者をださず、第110回看護師国家試験を受験できたことにほっとしています。

看護協会での活動

滋賀県看護協会 感染管理認定看護師 林 智也



まさかこのような時代が来るとは思っていなかったというのがこの新型コロナウイルスによる影響下での正直な思いです。

自分がすべきことは何か？そう自問自答しながら滋賀県看護協会に働きかけて頂くことになり、県内の感染管理認定看護師が不在である施設や高齢者施設といったさまざまな施設で感染対策の現状把握とアドバイスをさせていただいたことは貴重な経験でした。その感想はとにかく感染対策の優先順位を考慮するため、一つ一つの作業をどのように取り組んでいるのかを把握するのが難しかったことでした。

助言をする上で施設ごとの特徴を加味し、そのスタッフと協力することが前提であり、その施設の感染リスクをどうすれば低減できるかを考え、作業に関わる時間や内容、防護服の選択や着脱の状況などの把握に努めました。

物品が不足しスタッフも疲弊するような中、皆様が試行錯誤の中でも感染者を出さないために取り組まれている姿には大変勇気づけられました。

軽症者宿泊療養施設への出向や高齢者施設に向けた感染対策マニュアルの作成、県内各施設での講師や看護学校、JICA海外協力隊への指導など多角的に新型コロナウイルス対策に目を向け取り組んだこの特別な経験は、廣原会長をはじめ滋賀県看護協会の皆様との出会いによるものであり心から感謝しています。

まだまだ新型コロナウイルスという前例のないウイルスとの戦いが続く中、これからも様々な方々と協力して乗り越えていきたいと思ひます。

